

類を研究されていた故澤完先生をホクリクムヨウランの自生地にご案内した時、澤先生も同様の指摘をされていた。芹沢(2005)、澤(私信)によると、典型的なムヨウランは花が花茎から斜上して一方向(明るい方)を向いて着き、花弁は黄色で平開する(写真2C左)のに対し、ホクリクムヨウランの花は茎の先にやや集まって着き、花序が短い、花茎と子房はほぼ直角で花は方向性がなく下を向く、花は暗色で紫色を帯び筒状で開かない(写真2C右)などの特徴がある。

中田(2001)は富山県のホクリクムヨウランの自生地として、文献、標本、観察に基づき13の産地を挙げているが、少なくとも旧婦中町、旧山田村、上市町の産地には、ムヨウラン、あるいはムヨウランとホクリクムヨウランの中間的な形態

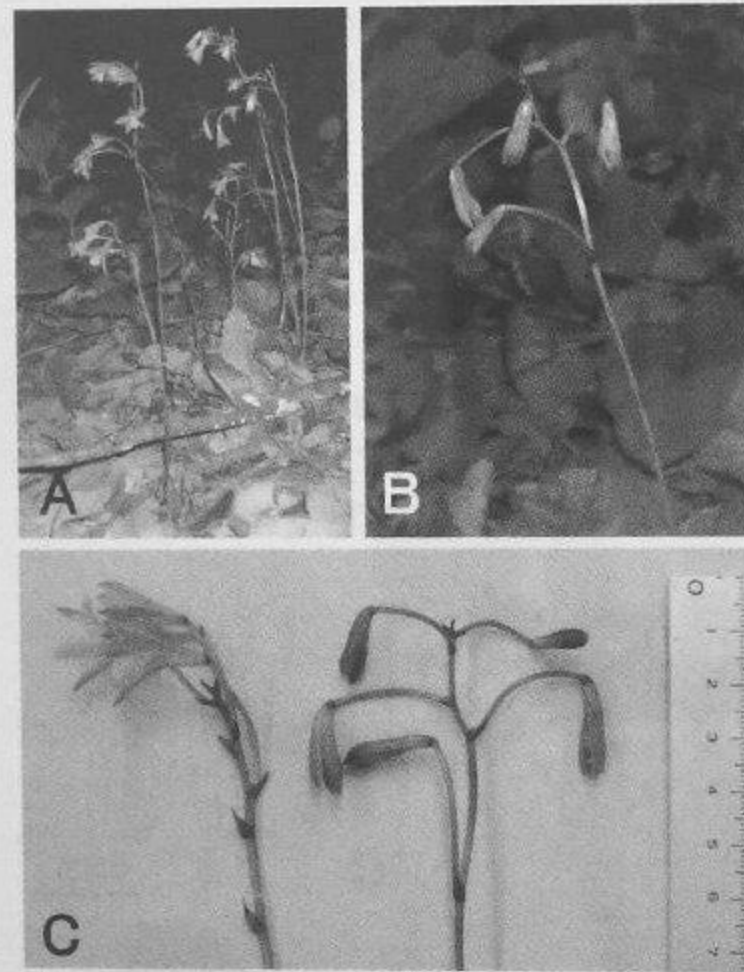


図2. ムヨウラン(A, C左)とホクリクムヨウラン(B, C右).

をもった個体が存在している(未発表)。ホクリクムヨウランは蕾の時にすでに花粉管が伸長しており、自家受精していると考えられるが、ムヨウランとの雑種が存在するのかもしれない。これらの産地の個体群について再検討が必要である。

標本、情報を提供いただいた高柳義則氏、若杉美仁氏、文献についてお世話になった広島市植物公園の世羅徹哉博士にお礼申し上げる。

#### 参考文献

- 青山幹男・田中隆荘・唐沢耕司. 1978. ショウキラン属(*Yoania*) 2種の核形態学的研究. 日本蘭協会誌. 24: 3-5.
- 橋本 保・神田 淳・村川博実. 1991. カラー版野生ラン. 295pp. 家の光協会, 東京.
- Inoue, K. and Yukawa, T. 2002. A new species of *Yoania* (Orchidaceae) from southern Nagano, central Japan. Acta Phytotax. Geobot. 53: 107-114.
- 前川文夫. 1971. 原色日本のラン. 495pp. 誠文堂新光社, 東京.
- 中田政司. 2001. 富山県におけるホクリクムヨウラン(ラン科)の自生地. 富山県中央植物園研究報告6: 43-46.
- 芹沢俊介. 2005. 愛知県のムヨウラン類. Bunrui 5: 33-38.
- 津田その子・守谷栄樹・原田幸雄・富田正徳. 2004. シナノショウキランの人工増殖と新種共生菌について. 名古屋国際蘭会議2004. pp.36-40
- ウィキペディア. 2006. 腐生植物. <http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E8%85%90%E7%94%9F%E6%A4%8D%E7%89%A9&oldid=9443099>

### 富山県におけるカヤネズミの繁殖の初記録

島佐代子<sup>1)</sup>・荘司たか志<sup>1)</sup>・山本茂行<sup>2)</sup>・村井仁志<sup>2)</sup>  
<sup>1)</sup>全国カヤネズミ・ネットワーク 〒615-8077 京都市西京区桂芝ノ下町19-20・<sup>2)</sup>富山市ファミリーパーク 〒930-0151 富山県富山市古沢254番地

#### The first record on breeding of a harvest mouse in Toyama Prefecture

Sayoko Hata<sup>1)</sup>, Takashi Shouji<sup>1)</sup>, Shigeyuki Yamamoto<sup>2)</sup>, Hitoshi Murai<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Kayanezumi Network Japan: 19-20, Shibanoshitacho, Katura, Nishikyoku, Kyotoshi, Kyoto 615-8077, Japan;

<sup>2)</sup> Toyama Municipal Family Park Zoo: 254, Furusawa, Toyamashi, Toyama 930-0151, Japan

#### はじめに

カヤネズミ *Micromys minutus* は体重7-14gの日本最小の齧歯類である(金子, 1996)。主に河川敷や休耕田に生息し、春から秋にオギ *Miscanthus sacchariflorus* や ススキ *Miscanthus sinensis* 等のイネ科草本の生葉を編んだ球形の巣(球状巣)で育児を行う。本種は宮城県以南の本州、四国、九州に分布するが、東北・北陸地域の記録は少ない(全国カヤネズミ・ネットワーク, 2006)。特に富山県は2000年の神通川河畔の営巣報告以前に記録が無く、県RDBの情報不足に指定される(富山県, 2002; 村井ほか, 2003)。そこで全国カヤネズミ・ネットワークでは本種の保護活動の一環として、富山市ファミリーパークと自然植物園ねいの里の協力を得て富山県で現地調査を実施し、宝達丘陵に新産地を発見するとともに県内で初めて繁殖を確認したので報告する。加えて、本県における本種の生態について若干の考察を試みた。

#### 方法

富山県西部は県東部より地形が緩やかで、暖流河川の小矢部川が流れ、宝達丘陵一帯にはため池や水田が広がる(富山県, 2002)。2003年10月

12-13日、既報地点および地形的にカヤネズミの生息環境が多いと思われる県西部を調査対象として、神通川河川敷(富山市興人町(既報地点)・千原崎・草島)、井田川・山田川河川敷(富山市婦中町)、庄川河川敷(砺波市権正寺、射水市広上)、宝達丘陵の休耕田(小矢部市論田、氷見市三尾・論田・熊無・寺尾)の11地点で現地調査を行った。既報地点の位置は富山県(2002)に未記載のため、報告者である自然植物園ねいの里の湯浅純孝氏への聞き取りで確認した。

調査地はいずれもオギ、ススキ、ヨシ *Phragmites communis* 等のイネ科が優占する草地である。但し既報地点は一部耕作地に転用される。2-3名1組で踏査し、本種の特徴である球状巣の発見により生息を確認した。個々の巣については、材料、地表から巣底部までの高さ(巣高)、営巣植物の葉の最高点までの高さ(植物高)、外観の状態、繁殖の有無を記録した。さらに2004年5月12日と2006年10月12日に、2003年の生息確認地点の再調査を行った。調査方法は初回に準じた。

#### 結果と考察

2003年10月13日、小矢部市論田でススキに作られた巣5個を発見し、うち1巣で無毛の幼獣を複数頭確認した(図1)。発見場所は標高100m付近に位置するスギ二次林に囲まれた急勾配の棚田法面と放棄田で、ともにススキが優占していた。巣の計測値を表1に示す。巣1と巣5は密に編まれた作りで、巣3は粗く巣内が透け、残り2巣は古く壊れかけていた。

11地点中、生息を確認したのは本地点のみであった。発見率の低さに加え、本地点と環境が類似する氷見市の他地点で生息が確認出来なかったことから、隣県の新潟県や石川県と同様に生息密度の低さと生息地の孤立傾向が示唆された(藤塚ほか, 2003; 石川県, 2000)。但し過去の生息状況が不明なため、生息地がもともと少ないのか、減少傾向にあるのかははっきりしない。

2004年の調査では巣は発見出来なかった。ススキの草丈は50-60cmであった。2006年にはススキに作られた壊れかけの巣を2個発見したが繁殖は





図1. 幼獣を確認した巣(巣1)

表1. 巣の計測値

No.	営巣地点の環境	巣高(cm)	植物高(cm)
1	水田法面	145	230
2	水田法面	155	200
3	水田法面	100	135
4	水田法面	117	200
5	放棄田	-	-

\*No. 5の巣高と植物高は未計測。

確認出来なかった。巣の植物高はともに120cmを超えていた。植生は2003年と比べてススキの割合が減り、クズ *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi やセイトカアワダチソウ *Solidago altissima* L. の割合が増えていた。

2004年に巣が見つからなかったのは、カヤネズミは120cm以上の草丈の植物に好んで営巣する傾向があり(澤邊ほか, 2005)、2003年と2006年に見つかった巣の植物高も全て120cm以上であったことから、調査時期が早くススキが十分な草丈に達していなかったためと思われる。ススキはオギと並び巣材に利用される割合が全国的に最も高く(全国カヤネズミ・ネットワーク, 2006)、2003年と調査時期が等しい2006年に繁殖が確認出来なかったのは、ススキの被度の減少が要因と思われる。富山県(2002)では本種の生息や繁殖の圧迫要因として草地環境の変化が指摘されており、放

置すれば今後本種の生息に深刻な影響を及ぼすことが危惧される。早急な生息地の保全ならびに、今回未調査の県東部を含む、県全域における生息状況の把握が望まれる。

#### 謝辞

現地調査にご協力頂いたムラーナ野生生物研究所の穴田哲氏、富山市ファミリーパークの加藤真由子氏、白石俊明氏、法木ゆかり氏、見浦沙耶子氏、森大輔氏、全国カヤネズミ・ネットワークの内田憲二氏、道券孝之氏、西村かおり氏、藤塚治義氏、山本聡子氏、生息地情報や文献をご提供頂いた自然植物園ねいの里の湯浅純孝氏、富山大学の横畑泰志氏、調査の便宜を図って頂いた株式会社野生生物管理の繁田真由美氏にお礼申し上げます。

#### 参考文献

- 藤塚治義・畠佐代子・繁田真由美・山本聡子. 2003. 新潟県におけるカヤネズミの新産地および分布の現状. 柏崎市立博物館館報. 59-65.
- 石川県. 2000. 石川県の絶滅のおそれのある野生生物 いしかわレッドデータブック(動物編), 154pp.
- 金子之史. 1996. カヤネズミ. 日本動物大百科1, 156pp. 平凡社, 東京.
- 村井仁志・白石俊明・間宮寿頼・南部久男・岡圭一・西岡満・神保美和子・森大輔. 2003. 富山県の哺乳類に関する文献1. 富山の生物. 42: 39-46.
- 澤邊久美子・畠佐代子・夏原由博. 2005. 堤防植生の刈り取りがカヤネズミ *Micromys minutus* の営巣に与える影響. ランドスケープ研究, 68(5): 571-574.
- 富山県. 2002. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブックとやま- 352pp.
- 全国カヤネズミ・ネットワーク. 2006. 全国カヤマップ2005特別版~カヤ原保全への提言Part 2~. 32pp. 京都.

## 富山湾で捕れたヒメゾウクラゲ

高山茂樹

魚津水族博物館 〒937-0587 富山県魚津市三ヶ1390

### A record of *Carinaria japonica* in Toyama Bay

Shigeki Takayama

浮遊性巻貝のゾウクラゲ類は、魚に良く似た形のゼラチン質の体を持っている。日本近海では、頭部触角と烏帽子状の小さな透明な貝殻を持つゾウクラゲ科Family Carinariidaeが3属8種と貝殻だけでなく例外を除いて頭部触角がないハダカゾウクラゲ科Family Pterotracheidaeが2属4種、知られている。これら12種は、黒潮流域およびその周辺、そして世界の温帯・熱帯水域に生息するものが多い(奥谷, 1997, 2000)。

対馬暖流流域の日本海沿岸では、これまでゾウクラゲ類の採集記録はごくわずかで、1997年4月から6月にかけて対馬海峡から能登半島にいたる日本海西部海域からカプトゾウクラゲ *Carinaria gales* とハダカゾウクラゲ *Pterotrachea coronata*、チュウガタハダカゾウクラゲ *Pt. hippocampus* の捕獲記録があるにすぎない(上野, 1998)。

ところが、2006年7月3日に射水市新湊漁業協同組合に水揚げされたシラエビ *Pasiphaea japonica* の中からこれまでに見たことがない生き物が採集されたとのことで、写真による同定依頼が新湊漁業協同組合の萩原和久氏よりあった。

写真から貝殻が認められるので、ゾウクラゲ科であることは分かった。しかし、写真だけでは貝殻の形が分からないので、後日冷凍保存されたサンプルを貰い受け、同定を試みた。同定の結果、貝殻や尾冠の形状からヒメゾウクラゲ *Carinaria japonica* であった。これまで、富山県沿岸ではヒメゾウクラゲの捕獲記録がないので報告する。

#### 採集個体の記録

採集日: 2006年7月3日

産地: シラエビを漁獲する中層トロールに混獲したため、富山湾奥の海底谷付近が産地

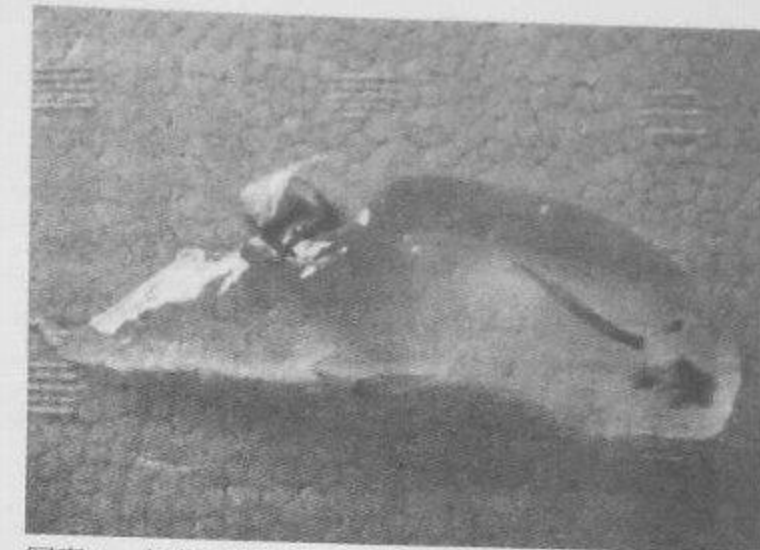


写真1. 採集直後のヒメゾウクラゲ(萩原和久氏提供)

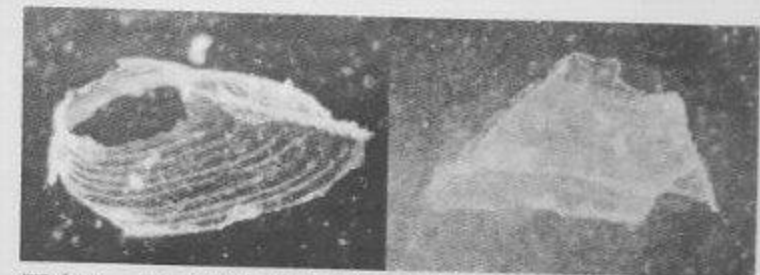


写真2. ヒメゾウクラゲの貝殻

と考えられるが正確な位置は不明。

大きさ: 全長48mm(液浸標本を測定)

貝殻の大きさ: 殻長12mm

殻頂部が欠損しており殻高は測定不能。

備考: 冷凍保存の過程で、同定の決め手となる貝殻の殻頂部が欠損しているが、その他の貝殻の特徴からヒメゾウクラゲに同定した。

今回、ヒメゾウクラゲが採集できたシラエビの漁場は、富山湾の沿岸部に発達する海底谷の斜面に位置している。そして、海底から離れて浮き上がってくるシラエビを掬い上げる漁法がとられている(内山, 2004)。このように特殊化した漁法なので、これまで採集されることが少なかったサメハダホウズキイカ *Cranchia scabra* やユウレイイカ *Chiroteuthis imperator* など中層浮遊性のイカの仲間が、シラエビの混獲生物として発見されている(高山, 未発表)。今後、シラエビ漁の混獲生物の調査によって、これまで生息が確認されていない富山湾の中層浮遊性の生物が見つかる可能性が高い。

この報告を行うにあたって、標本と写真を提供していただいた新湊漁業協同組合萩原和久氏に感謝する。